



元「緑のふるさと協力隊」

浅田真佑さん

profile あさだ・まゆ 1994年石川県小松市生まれ。青年海外協力隊に参加するため、日本人として芯になるものを得よう「緑のふるさと協力隊」に応募。2016年4月から1年間、舞川地区の営みを体感した。現在は復学し、教員を目指している。

Interview
キーマンに
聞く

今の時代にちょうどいい場所

舞川地区には温かく、どこか懐かしい特有の色とにおいがありました。

伝承芸能、伝統行事、方言や人柄。さまざまな場面で舞川らしさを感じた一年だったと振り返っています。

舞川は行事が豊富。文化祭やチャリティー福祉祭、運動会、その他スポーツ行事などで多くの人と出会いました。

また、コメ、ソバ、リンゴ、和牛、花きとたくさんの農家から舞川地区の農業を教してもらいました。豊かな自然環境の中で育まれている舞川の子供たちと関わったことは良い経験になりました。

舞川の素晴らしさは、地域内の仲間意識が強いこと。そして舞川を誇りに思っていることだと思います。

私は、今の時代に生まれてよかったと思っています。便利になりすぎて人間関係が希薄になったといわれますが、今の時代だからこそつながれた人もたくさんいます。舞川の人たちもそうです。

今の時代を楽しむ姿勢が、子供たちの希望になると信じています。

舞川で過ごした「極上の日常」は、私の宝物です。

●進化を止めない「五区楽そば倶楽部」

舞川5区では耕作放棄地を減らすため、ソバの栽培を始めた。「五区楽そば倶楽部」を通じて「深入そば」を作り、産直などで販売している。手作業で殻を取り除いたソバ粉は、白くきめが細かい。コシが強く、喉越しが良いと評判だ。

1 同クラブの氏家明代表は「活動を続けて13年目。はじめは0.1ヘクタールだったソバ畑は2ヘクタールに拡大。先進地からノウハウを学び、商品化までこぎつけた。活動は楽しくないと続かない。ワイワイにぎやかに取り組んでいる」と笑顔を見せた。2 ふかしたソバ饅頭の出来に期待が高まる。3 秋の祭りに向けてソバ饅頭の研究は続く



舞草神社の奥にそびえ立つ大部ヶ岩からの眺望。眼下に広がる大パノラマは見るものを圧倒する。

4 和気あいあいと

訪れる変化を楽しむのが舞川スタイル



価値は掘り下げて生み出す

「人が集まる場所をつくる。これが大事」そう話すのは、舞川18区集落協定代表の佐藤圭一さん。同区は、地域資源の活用と保全活動が評価され、2004年に県の「中山間地域モデル賞」を受賞した。

佐藤さんは、損得ではなく「舞川のために楽しいことをやる」という気持ちが高まった結果だと分析する。

現在18区は、非農家や都市部の人々にも協定に加入してもらい、一緒に農地の維持作業や交流活動を行っている。

「近年、中山間地域の農地は負の財産のような扱いを受けている。利益を生まない農地を維持していくということ

は今の自分たちの大きな課題」とビシヤリ。「私たちが大切にしていけないものを、次の世代に守ってくれというのは虫が良すぎる。私たちが舞川の価値を掘り下げて、子供たちと共有することが大切」と続けた。

舞川地区には磨けば光る原石が数多く眠っている。それぞれ独自に活動してきたヒト。それぞれ独自に進化してきたモノ。それぞれ独自に発展してきたコト。これらを組み合わせることで、新たな時代に合った価値が生まれる。

「集まって話し合えば、解決策が見えてくる。今までだつて、そうしてきた。これからだつてできる」佐藤さんは前を向いた。

18区には、番台川の源流がある。こんこんと湧き出る水を二手に分け、天然の石を加工した水路を伝って田に水を供給している。地元で「ばおいわけ」と呼ばれるこの堰は、1772年に編さんされた安永風土記に記されている。200年以上前から地域内の人々の手によって管理されてきた農業遺産だ。